哲學研究　第百九十三號

バビロニア人のロゴス觀

（ヘラクレイトスのロゴス觀の原型）

中原與茂九郎

一

ギリシヤ哲學史上最初にロゴス λόγος なる語に特殊な意味をもたせて使用したものは小亞細亞ミレトス出身の所謂イオニア學派の祖タレスの流をくむヘラクレイトス Heracleitos (Ca 510—450 B. C.) である。(一) ロゴスの本來の語義は言葉、聲、話、語である。ヘラクレイトスの使用したロゴスの意味に就いては種々の解釋が古來行はれてゐるが、彼が萬物の根源と考へた火 πῦρ とロゴスとを同一視したと解釋せられる點より考察すればヘラクレイトスはロゴスなる語を根源、原理 ἀρχή の意味に用ひたと考へられる。(二) イオニア學派のアナクサゴラス Anaxagoras (Ca 500—428 B. C.) がヌース νοῦς なる語に物質の原素に作用する原理 τὰ ὁμοιομερῆ の意義をもたしめ、プラトンが ἰδέα なる語をもつて特殊な用語となした如く、觀念表現の用語としては σοφία「智慧」、νοῦς「心」、

νόμα,「思想」、νόησις「知識」、ἀρχή「原理」、ἰδέα「型」等の諸語が既に存在してゐたにもかゝはらず、ヘラクレイトスが言葉、語を表はすロゴスなる語をもつてギリシャ哲學史上重要な觀念を表現せしことには何等かそこに理由があるのではあるまいか。筆者は以下ヘラクレイトスのロゴス觀の原型と考へられるバビロニアに於けるロゴス觀を研討して且つそれとイオニア學派のロゴス觀との關係を考察せんと欲するものである。

萬物の根源が――ヘラクレイトスの場合は火である――ロゴスであるとのギリシャ思想とアナロヂーをなす思想がバビロニアに於ても見出される。バビロニア思想に於ては水 nu が――これは神話化されて apsu となる。apsu はシュメール語の abzu, ab, "dwelling," zu "wisdom," "knowledge" 卽ち「智慧の棲家」でバビロニアの神話では智慧の神エア Ea の棲家となつてゐる。――萬物の根源である。これはイオニア學派の祖タレスの思想と一致す。而してバビロニアに於ては水は音聲、叫、言葉、語の意味を表はす nummu と同一視され、この nummu が萬物の創造の原理と考へられてゐる。しかし、こゝに前もつて斷つて置くことはバビロニア人はシュメール人 Sumerians、アッスリア人 Assyrians 等、同文化系統人民と共に實際的現實的人民であつて哲學的思索的

能力はいたつて薄弱であつたのと、且つ彼等のメタフイジクも宗教的方面卽ち神學にのみ制限せられ、しかもその神學は唯物的傾向を多分にもつてゐた爲、彼等の哲學思想を純粹に把握することは甚だ困難である。しかし唯物的宗教思想のうちに素朴的ではあるがロゴス觀念を汲取ることが出來るのは幸ひといはねばならぬ。

註（一）Zeller, Die Philosophie der Griechen, 7. Aufl. 1. Teil, S. 839 及び 840——5 の脚註參照

（二）ibid. SS. 841—2 の脚註、尙ほヘラクレイトスのロゴス觀については波多野精一博士著「西洋宗教思想史（希臘の卷第一）」改訂版のヘラクレイトスの項を觀らるべし。

二

バビロニア人の間には古くより天地開闢說（コスモゴニー）が語られてゐた。今日殘存してゐるバビロニアのコスモゴニーには二種類ある。その一種は所謂 enuma elish 創造物語と稱せらるゝ、內容も詳細にしてほゞ完全な形態をもつて七個の楔狀泥章 Cuneiform clay tablets に書きしるされてゐるものである。これはニネヴ Nineveh に在つたアッスリア國王アッシュールバニパル Assurbanipal (668—624 B. C.) の文書館より發見されたもので、今日大英博物館に收藏されてゐる。他の一種はシュメール語とバビロニア語との二語で併記されてゐるコスモゴニーであつて、今日傳つてゐるテキストは新バ

ビロニア時代(625—539 B.C.)のコピーである。しかしこれの起源は非常に古きものであつて、enuma elish 創造物語の基礎をなすものであるとバビロニア人自身が告げてゐる。(1) これも大英博物館に收藏されてゐる。

enuma elish 創造物語の第一楔狀泥章には次の如く書かれてゐる。

1. e-nu-ma e-liš la na-bu-u ša-ma-nu　　上には天が名づけられなかつた時に、
2. šap-liš am-ma-tum šu-ma la zak-rat　　下には地が名で呼ばれなかつた(時に)、
3. apsu-ma riš-tu-u za-ru-šu-un　　深淵(アプス)、それ等の第一の種子、
4. mu-um-mu ti-amat mu-al-li-da-at gi-im-ri-šu-un　　mummu なる Tiamat、萬物の創造者、
5. mi-šu-nu iš-ti-niš i-ḫi-ṣ-u-u-ma　　彼等の水が一つに合した。
6. gi-pa-ra la ki-iṣ-ṣu-ra ṣu ṣa-a la si-'　　葦原が形づくられず、葦芽が萌出でなかつた(時に)、
7. e-nu-ma ilani la šu-pu-u ma-na-ma　　神々が輝き出でぬ時に
8. šu-ma la zuk-ku-ru ši-ma-tu la [ša-mu]　　名が稱へられず、運命が定まらぬ(時に)
9. ib-ba-nu-u-ma ilani [.....]　　神々が創造された。
10. ^{ilu}Laḫ-mu ^{ilu}Laš-ḫa-mu u-ta-pu-u [.....]　　ラクム神とラカム神とが輝き生れた。

11　a-di ir-bu-u 〔……〕　時が經た。

12　An-šar ^{ilu}Ki-šar ib-ba-nu-〔u……〕　アンシャル神とキシャル神とが創られた。

13　ur-ri-ku umi šud 〔……〕　日が長く過ぎた。

14　^{ilu}A-ùn a-〔　〕　アヌ神……

15　An-šar ^{ilu}〔……〕　アンシャル神、……神、……

此創造物語をエヌマ・エリシュ物語と稱するのは第一行の最初の二語(エヌマ＝時に、エリシュ＝上に)をとつてかくよぶのである。

この所謂バビロニアのGenesisによれば、天地の名も無かつた太初にたゞ存在するものは天地の種子(根原)なる深淵(アプス)と萬物の創造者にしてmummuなるTiamat(海)であつた。この兩者が合して神々及び其他の萬物が創生するのである。ApsuもTiamatも共に水の表象化されたものであることは五行目に「彼等の水が合して」とあるによつて明かである。然らば何故水をapsuとtiamatとに區別したであらうか。apsuは前述した如く、バビロニアの神話に於ては智慧の神エアの棲家とされてゐる。エアの別名はNin-idi-azag「清き河の主」と稱せられてゐる。(二)さればabzu卽ちapsuは「清き河」從つて淡水の表象であらう。又tiamatは古代バビロニア語卽ちAkkadianのtiamda, バビロニア、

アッスリア語のtamdu tamtuで「海」の意であつて海水の表象であらう。それはTiamatは又此物語の他の場所で'ummu ḫubur patikat kalama「母なる海水、萬物の創造者」と呼ばれてゐることによつても裏づけらる。(第三泥章の二十三行。)かくバビロニア人は水muを淡水と海水とに區別したには次の如き理由がある。

ヘロドトスはエヂプトの文明はナイル河の賜であるといつてをるが、バビロニアに於てもその文明はチグリス=ユーフラテス兩河特に後者とペルシャ灣とに依據するところが多い。實にユーフラテス河とペルシャ灣とはバビロニア文明構成の二大自然要素であつた。バビロニア人が地中海方面と交渉をもつようになつてからはアッカード語のtiamdam alidam, アッスリア語のtamtu eliš卽「上海」をもつて地中海を示し、tiamdam sabilidam, tamtu šapliš卽「下海」をもつてペルシャ灣を稱んだ。しかし普通バビロニア人は海tiamda, tamdu, tamtuでもつてペルシャ灣を指した。彼等はユーフラテス河をPurātu (シュメール語ではPuranun)「大河」と稱した。毎年定期に增水し、メソポタミアの沖積平野を肥沃し、天產豐かな樂土たらしむる構成力を有つと同時に、治水工事を長閑にふせんか忽ち人畜農產物に大慘害を與ふる破壞力をも併せ有するユーフラテス河を男性とみなし、これをApsu「深淵」と表象化し、他方、ユーフラテスの流

をうけ入れ、多くの「海の幸」nig aba を供給するペルシャ灣を女性とみなし、これを Tiamat（わだつみ）と表象化したのは、その文化構成の自然的基礎を河と海とに依據したバビロニア人にとつては當然の思惟であつた。エヌマ・エリシュ創造物語によると Apsu と Tiamat とはユーフラテス河（淡水）とペルシャ灣（海水）との表象であるが兩者の本質は水 mu である。Apsu も Tiamat も同一物（水）の二面の表象である。兩者は二にして一である。されば、エヌマ・エリシュ物語の第二泥章以下に於ては海の表象 Tiamat（わだつみ）の活動が神話化されて物語られてゐる。

然しからば此創造物語の第一泥章第四行目の mummu Tiamat mu(w)allidat gimriśun「mummu なる Tiamat 萬物の創造者」の mummu は何を意味するか。バビロニアの訓詁學者はエヌマ・エリシュ物語の註釋を書いた。その註釋のかゝれた楔形泥章の一部が大英博物館に所藏されてゐる。それによると訓詁學者は mu-um-mu rig-mu 卽ち「mummu は大聲なり」と註釋してゐる。(三)

第四行目に於て用ひられたが如き mummu の用例を他にもとめるならば、エヌマ・エリシュ物語の第一泥章（大英博物館所藏泥章記號 K. 1376 の裏面三行目）にはバビロンの主神にして天體の神として「光りの神」なる Marduk は mu-um-mu ba-an〔ka-la?〕卽ち

「mummu萬物の創造者」と記されてゐる。又アッスリア國王 Marduk-aplu-iddina (721—710 B. C.)の碑文には「悟性をEa mummu ban kala(エア・ムンム・萬物の創造者)が國王に、Ninidiazag (=Ea)が祝福するところの賢き思惟とゝもに與へたり。」(四)とある。

以上擧げた用例に含まれたmummuの意味は一切のものがよつてもつて創られる原素、原形、原理と解釋さるべきであらう。ギリシャ哲學上の用語ἀρχήの作用をなすものであらねばならぬ。バビロニア人は萬物の根源、第一原理を聲、換言せば言葉を意味する語mummuで表現した。

しからばバビロニア人は何故に聲、言葉をもつて萬物の根源、創造の原理を表現するの用語としたであらうか。それはバビロニア人の宗教思想に依據してゐるのである。バビロニア文明の創造者シュメール人Sumerianｓもその繼承擴大者バビロニア人も神を人格化し、神の力は神の口より發せられる言葉として表現されると考へた。神の力卽神の言葉は屢、嵐(シュメール語ではud, バビロニア語ではūmu)に表象された。例へばバビロニア宗教の大本山ニップール Nibru or Nippur の主神にして、「神々の王」「全地の主」たるエンリル Enlil —— バビロニア人はこれを Bel「主」と稱した —— の禮拜に用ひられたシュメール語にてかゝれた禮拜式文には、エンリルの言葉に就

いて次の如く書かれてゐる。(五)

彼(エンリル)の言葉enemはエクルE-kur(エンリルの神殿)より急ぎ出で行く。

彼の言葉は胸深く造られたる大嵐ud gu-da、

彼の言葉は憤怒の嵐ud lú-lú、

彼の言葉は強き力u gu-daなり。

他のエンリル禮拜式文によれば、エンリルの「高きより發した言葉は地を掃蕩し」「地の繁榮を壞ち」「シュメールより平和を奪ひ」「人々は悲歎に暮れた。(六)」失はれた地上の平和は「憤怒の嵐」が神の許に歸つた時に恢復される。(七)

シュメール人は古くより法の源泉を神の言葉に見出してゐる。恐らく古代世界最初の社會改革者たる、都市國家ラガシュLagashの國王ウルカギナUr-kagina(Ca 2850 B.C.)の碑文には「ウルカギナは彼の(ラガシュの主神Ningirsuの)言葉enem-biを結集した。」と書いてある。(八)(バビロニアに於ける最初の法典制定者はウルカギナと考へられてゐる。(九))

かくの如くバビロニア人は神の言葉に偉大なる能力を認めた。バビロニア人が萬物の根源、創造の原理を表現するに聲、言葉を意味するmummuなる語を用ひたのは

上述の如き理由によるのではあるまいか。バビロニア語のmummu「聲」とīmu「嵐」との間には言語學上の關係さへ考へられるのである。(一〇)

mummuは又これがbīt mummu「學院」、「アカデミア」と用ひられるとき、知識、學問の意をもつ。(一一)

バビロニアに於ける天地の創造はTiamatとMardukとの鬪爭の結果として行はれてゐる。次に簡單にその物語を述べるならば、Apsu, Tiamat等は新しく造られたAnshar, Kishar等の神々を滅さんと欲した。舊秩序と新秩序との鬪爭の原因は相入れざる道alaktuにあつた。舊秩序の代表者Tiamatは新生の神との戰鬪の戰士として十一個の怪物をつくり戰備をとゝのへた。智慧の神はこの陰謀を探知するやその父Ansharに告げた。しかし天神AnuもEaもTiamatに對する勝算はなかつた。光の神Mardukのみが Tiamatとの決戰を志願した。しかし彼の戰勝後の行賞として運命šimtuの決定權を要求した。(以上第二泥章)。こゝに於てAnsharは使者を派して'Lahmu及Lahamu兩神にTiamatの謀叛の計畫とMardukの申出とを通達した。二柱の神は神々の會議を開き、Mardukの志願を受諾し、彼の出陣を祝するため盛大なる宴を張つた。(以上第三泥章)。神々の代理者mutir gimilušunu マルヅックは右手に「炎の戈」abubuと網saparuとを携

へ、「嵐」ūmu と稱せらるゝ弓、矢、箙で甲裝された四頭馬の戰車に打乘り、一陣の風を從へて出陣した。彼はティアマートと一騎打の勝負を行ひ、有つたる網をティアマートにかぶせ、一刺し、その咽喉に風を吹き込み、矢を腹中に打込み、引倒し、死體の上に突立ち上つた。かくて、マルヅックはティアマートの配下の十一の怪物を網をもつて捕縛し、ティアマートの愛人 Kingu より「運命の板」tup šimāti を分捕り、己の胸間に吊した。しかる後マルヅックはティアマートの死體を魚の如く二つに裂き、それをもつて天地を造つた。(第四泥章)第五泥章に於ては天體の日月星辰の創造が物語られ、第六泥章にては地上の人類を始め一切生物の創造が述べられ、最後の第七泥章に於ては殊勳者マルヅックの功績が物語られてゐる。

以上はエヌマ・エリシュ創造物語の荒筋であるが、兎に角、萬物の創造者 mummu なるティアマートは上述の如く、マルヅックとの鬪爭に敗北し、その身を殺して、萬物の創造者としての役目を果したのであつた。物語は素朴的にティアマートの身體が二分されて天地が創造されたと語つてゐる。バビロニア人の天地開闢說の重要な意義は、萬物の創造は鬪爭を通して行はれたといふ點にある。非思索的非形而上學的人民であつたバビロニア人は「鬪爭は萬物の父なり、萬物の王なり。」とか「萬物は爭

ひによつて生ず」とヘラクレイトスの言ひし如くに、(一二)鬪爭をジャスティファイしなかつたけれども、彼等のコスモゴニーのうちに此思想が含蓄されてゐることは見逃せない。諸民族諸國民を征服して數度西方亞細亞に大帝國を創立したバビロニア人、アッスリア人は――殊に後者はHenri Berrも言つてる如く、鬪爭のための鬪爭、それをもつて最大快事とした好戰國民だつた。(一三)――この思想の完全な實踐者具現者であつた。

上述したところによつて、甚だ素朴的ではあるがバビロニア人の思想中に、創造の原理としてのロゴス――バビロニア人にはmummu――の觀念が存在し、それが萬物の根源としての水とも同一視されてゐること、而して創造の原理としてのmummuの本來の語義はギリシャ語のロゴスの場合と同樣に聲、言葉、語であることを知り得た。

(一) A. Jeremias, The Old Testament in the Light of the Ancient East, Eng. Transl London 1911, Vol. I. p. 142.

(二) Keilinschriftliche Bibliothek, Bd III, S. 186.

(三) Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum. Vol. XIII. S. 747, rev. 10.

(四) Keilinschrift. B., Bd III, S 186.

(五) S. Langdon, Sumerian and Babylonian Psalms, Paris 1909, p. 72.

(六) Journal of Royal Asiatic Society, 1918, p. 445—6

(七) ibid, p. 447.

(八) ウルカギナの圓錐碑文 B の Col. XII, 27—28. 巴里ルーブル博物館所藏

(九) Cambridge Ancient History, Vol. I, p. 387.

(一〇) 兩者の語根として nu「水」が考へられる。Haupt, Prince 等のアッスリオロヂストは nunnu を nu の重複したものと解釋してゐる。Muss-Arnolt, Assyrisches Hand=wörterbuch, S. 553 參照

(一一) Muss-Arnolt, op, cit. p. 552.

(一二) 波多野精一博士、西洋宗教思想史改訂版、五五二頁

(一三) L. Delaporte, Mesopotamia, London 1925, p. viii, H. Berr の序文

三

最後にバビロニアのロゴス思想とイオニア學派の祖タレスの原的物質論及ヘラクレイトスのロゴス觀との關係について卑見を述べて見たい。しかし何等兩者の依屬關係を證明すべき積極的な史料は存在しないのであるから、たゞ一個の憶說を提出するに過ぎない。

ギリシヤ七賢人の一人と稱せらるゝ小亞細亞イオニア地方のミレトス出身のタレス Thales (Ca. 640—550 B. C.) は著述を書き殘さなかつたが、彼が水を ὕδωρ を萬物の根源 ἀρχή と考へたことは他の哲學者によつて傳へられてゐる。しかし何故彼が水をもつて原的物質と考へたかの理由に就いては何等知るよしもない。アリストテレ

スでさへタレスの水根源説に就いては彼自身の推測を述べてゐるに過ぎない程で、(一)タレスに關する知識は古代に於てもまことに貧弱であつた。ヘラクレイトスはタレスは「第一の天文學者なり」πρῶτος ἀστρολογήσαι と傳へてゐる。(二)タレスの祖先はフェニキア出身と傳へられてゐるが、(三)彼自身も西紀前七世紀末頃にエヂプト・カルデア(バビロニア)、フェニキア等の東洋諸國を旅行したとも傳へられてゐる。もし彼の東洋旅行が事實であつたとしたならば、タレスはその東洋先進文明國旅行の洋行土産としてバビロニアの水根源説と天文學とを携へ歸つたであらう。この推定は、アリストテレスが彼自身の臆説を立てし意味に於て、一個の臆説として可能であらう。

ヘラクレイトスに於ては萬物の根源は火πῦρ と考へられ、それはロゴス λόγος と同一視されてゐる。ギリシヤの資料によつてはロゴスなる語が何故ヘラクレイトスによつて原理といふ意味を有たされるようになつたかの理由に就いて説明することは出來ない。しかるに上述せし如くバビロニアに於てはnummuといふ聲、言葉と云ふ意味を有つ語が原理の義に用ひられた。

次にヘラクレイトスのコスモゴニー觀を見る要がある。彼は火を萬物の根源と考へてゐるが(五)火そのものは天地創造の直接の起源とはなつてゐない。火と天地と

は海を媒介として間接の關係にある。即ち彼は「火の變動は第一に海、海の半分が地、他の半分が天空――直譯は嵐 πρηστήρ ――となつた」「海はロゴスそれ自身に從つて定められ、形成された、地が成生された先に」と述べてゐる。(六) 彼は天地構成の直接の起源を海 θαλασσα と考へたのであつた。此事は早くクレメンス Clemens of Alexandria (Ca. 150―215 A. D.) も認めてゐる。即ちクレメンスは、ヘラクレイトスは「天地構成の種子」σπερμα τῆς διακοσμήσεως を海 θαλασσα と名づけたと述べてゐる。(七) ヘラクレイトスが火より直接ではなく、海より天地が構成されたと考へた點に注意するの要がある。既述のバビロニアのエヌマ・エリシュ創造物語の第四泥章に於ける天地創造は、光の神マルヅックがティアマート(海)を二分して天と地とを造つてゐる。これに於ても天地構成の起源は海である。バビロニア人のコスモゴニー觀とヘラクレイトスのそれとの間にはその根本に於て密接なアナロジーが存在してゐる。

飜つてヘラクレイトスの一生を兩紀前約五一〇―四五〇年とすれば、彼の生涯はかの有名なペルシャ戰役(五〇〇―四四九 B.C.)と年代を同うし、ペルシャ軍隊とゝもにペルシャ、バビロニア等の東方文物がヘラクレイトスの鄕市エフェソスを始め小亞に於けるギリシャ植民都市は言ふに及ばず、ギリシャ本土に迄も移入した時代で

あつた。かゝる新時代に生活したヘラクレイトスは民主々義を心から嫌つた獨創的な貴族主義者であつたから貴族的專制的傾向をもつた東方文化は彼の趣味に合したものであつたらう。(八) 東方文化中たま〳〵バビロニアのロゴス思想を知るに及んで、これを參考モデルとし、獨創を重んじた彼のことであるから、これに彼獨自の見解を織り込んだところの、換言すれば、バビロニアのロゴス觀の形式に獨創的な彼自身の思想內容をもつたところのロゴス思想を作り上げたであらうとの推定は一臆說として可能ではあるまいか。而してロゴス觀と關聯して、既述のバビロニアのコスモゴニーに現はれたる鬪爭思想とヘラクレイトスに於て重要思想をなす「萬物は鬪爭によつて生ず」の思想との間に、又上述のバビロニア人のコスモゴニー觀とヘラクレイトスのそれとの間に、根本的に一致するアナロジーの存在することは、この推定の可能のプロバビリチーを重加するものではあるまいか。筆者の恩師、牛津大學のアッスリア學敎授ラングドンS. Langdon先生はバビロニアのロゴス思想はイオニア學派のそれに直接か或は間接的にか影響を與へたとの說を立てられてゐる。(九) 筆者も亦一臆說として、バビロニアのロゴス觀のヘラクレイトスのそれの原型說を主張するものである。

註 (一) Zeller, op. cit. SS. 261－2.

(二) Diehls, Die Fragmente der Vorsokratiker, Bd. I, B. Fragment 38.

(三) Zeller, op. cit., S. 254.

(四) ibid., S. 259.

(五) Diehls, op. cit., B. Frag. 30.

(六) ibid., 31.

(七) Clemens, Stromata, v. 105, in Diehls, op. cit. 31.

(八) 波多野博士、前出書、一三八頁

(九) Journal of Royal Asiatic Society, Vol. L. p.p. 433—449.